

温故知新のホルモン療法：ノアルテンを用いた月経困難症治療の実際

平成10年卒 松本直樹

私は退局後、2015年から埼玉県本庄市にある松本産婦人科医院を後継し、院長として診療しています。当院は祖父(松本包嘉, S15卒)、父(松本常嘉, S43卒)と続いて分娩取扱い有床診療所として診療してきましたが、2007年に分娩取扱いを終了しました。現在は婦人科一般を主な診療とする無床診療所であります。

町の婦人科医として日々診療してきましたが、その中で月経困難症・PMSの患者さんがとても多いと感じています。月経困難症に対して低用量ピル(LEP)をはじめ、ジエノゲスト(DNG)やミレーナ(子宮内黄体ホルモンシステム)を使用した治療は、昔と違い現在では日本中で広く行われるようになりました。これらの治療はいずれも有効ですが、一方で適さない場合もあり、そのあたりが依然controversialです。

よくある議論は、40歳代のLEPをどうするかという問題です。当院では有害事象や体調に注意しながらLEPを継続することが多いです(最長49歳まで)。その一方で40歳代の患者には一切LEPを処方しないという診療方針の施設もあります。また若年者の場合の方針も分かれます。小学生・中学生程度では、痛み止めなどで様子を見させることも少なくないように思います。父などはよく漢方薬を処方していましたが、効果や服薬コンプライアンスの点で私はその方針の有効性にやや疑問を感じます。とはいえLEPでは嘔気などの副作用でなかなか続かないということも多いです。またDNGは嘔気や頭痛の副作用が少ないですが、月経不順や不正出血を起こしやすく、そのあたりを許容しながら治療を継続する必要があります。

そのような40歳以上や若年者の月経困難症患者に対し、私が積極的に処方しているのがノアルテン錠5mgです。その成分はプロゲステンの一種であるノルエチステロン(NET)です。LEPではルナベル配合錠LD/ULDにプロゲステンとして1錠あたりNET 1mgが含有されています。NETはプロゲステンとしての力価が高く、5mg 1錠でも十分に強力です。そのため、NET単剤でも月経調整ができたり、さらにいわゆるミニピルとしても活用されてきました。

NETの効果について、月経困難症の症状軽減効果はLEPやDNGに劣りますが、それに準ずるぐらいの効果は期待できます。月経調整作用が強く、超低用量LEPやDNGでよくみられる不正子宮出血は起きにくいです。私は、さらにプレマリン錠(結合型エストロゲン, CEE)0.625 mg 1~2錠と組み合わせることでより安定性が高まると考え、この2剤を組み合わせた処方を頻用しています。使いやすい理由のもう一つが有害事象が軽微なことです。LEPと比較して血栓症リスクが低く、また嘔気などの胃腸症状もあまり出ません。参考として、以下に当院の症例を示します。

症例1: 11歳(小5)。主訴は月経痛。初経から月経痛が重い。NET 5mg + CEE 0.625mgの周期服用を開始(3週服用・1週休薬)。速やかに月経痛が改善し治療継続中。

症例2: 12歳(小6)。主訴は月経痛とPMS(頭痛・嘔気)。エコーで子宮後屈を認めた。NET 5mg + CEE 0.625mgの周期服用を開始。月経痛・PMSともに改善し治療継続中。

症例3: 44歳, 未婚, G0P0。併存症として不安障害, 頭痛。主訴は月経痛。エコーで子宮腺筋症, 血液検査で鉄欠乏性貧血(Hb 11.0, フェリチン 24)を認めた。貧血に対し鉄剤を, 子宮腺筋症・月経困難症・過多月経に対しDNG 0.5mg 2錠/日を開始した。効果不十分のためDNG 1mg 2錠/日へ増量。過多月経が改善せずまた不正子宮出血の持続もあり, DNGを月24日服用

の周期投与法に調整した。やや改善したものの、不正子宮出血は起きやすい状況が続いたため、CEE 0.625mg 2錠/日 連日服用+ NET 5mg 2錠/日 周期服用(月24日)に変更した。その結果ようやく症状が安定した。

ノアルテン錠は、日本では1957年に販売開始されたプロゲステロン製剤です。その後、より効果の高いプラノバル配合錠、ソフィアA配合錠などの中容量ピルが主流になり、ノアルテン錠の使用される場面が減ったようです。さらに日本初のLEPとして2008年にルナベル配合錠LDが発売され、特に月経困難症治療においてはLEPが主流となりました。近年ではDNG 1mg錠、0.5mg錠も多く使用されるようになり、また新しいLEPとして天然型エストロゲンであるエストロールを使用したアリッサ配合錠、新しい避妊用ピル(ミニピル)としてドロスピレノン単剤であるスリダ錠が登場しました。このように新しい薬が治療の中心となっていく流れは常にあり、それは歓迎しています。しかしそのような中でも、ノアルテン錠のような、古い薬でまだまだ活用する価値が高いものもあります。温故知新のホルモン療法の一つとして、皆さまの日常診療の参考となり、そして患者さんの幸せにつながればと思います。

編集後記

「先生!!同窓会誌凄いですよね!!毎年厚くなって行きますもんね!!」と誰かが嬉しい事を言ってくれました。

現役、OBともこぞって寄稿して頂き本当にありがとうございます。特集は温故知新だけど投稿したのは小生だけで、企画は外れました。残念!!

久慈先生は、100歳までお元気でした。今や伝説ですが、こうやって原稿にして頂かないといつか消えて行ってしまいます。中を読んで頂ければ久慈先生の為人や魅力が分かって頂ける思います。

さて、表紙はシクラメンです。若い先生は「シクラメンのかほり」という唄を知っていますか?小椋桂作詞作曲で、布施明の代表的な唄です。1975年作曲と言うから未だ生まれていない先生も居るでしょう。「真綿色すがしたシクラメンほど清しいものはない・・・」歌詞は小椋桂曰く、北原白秋の文、プレスリーの唄のフレーズパクリでレコードのB面用だったとYouTubeで話しをしていました。この唄が世に出た頃は、そもそもシクラメンにかおり等無かったそうです。(今は品種改良でかおりのあるシクラメンもあるそうです)人生は思い通りに行かない事も沢山ありますが、この話の様に思いもよらず上手く行く事もあると言う事です。

人生塞翁が馬、これからと言う若い先生、今自分が出来る事をコツコツとやって行けば道は開けます。OGOもまだまだこれからです。頑張りましょう!



広報部・森本 紀

会報第43号

令和8年3月

発行人

東京慈恵会医科大学産婦人科学教室同窓会「妙手会」

印刷

スピックバンスター株式会社

文京区関口 1-47-12

電話 03(3260)8151